

翻訳

R. シャープリー 著

## 「ホスト コミュニティ：観光に対する認識と反応」

— (The Sage Handbook of Tourism Management 所収) —

Comments & Tentative Translation of “The Host Community: Perceptions of and Responses to Tourism” by R. Sharpley, in *The Sage Handbook of Tourism Management: Applications of Theories and Concepts to Tourism*, Sage Publications Ltd., 2018, pp. 537-551.

太田 均\*  
OTA Hitoshi

This paper raises the problem of whether the research on host perceptions, which has long attracted attention and matured with respect to destination management, is comprehensive and based on theoretical and methodological foundations. In other words, he points out that it is important to clarify the factors of how residents perceive and react to tourism and tourists, which vary from region to region, from a multidimensional approach through qualitative rather than quantitative research. This paper, which focuses on the research issue of host perceptions, has important implications for tourism research in Japan, where governance in tourism destination management is needed in various parts of the country.

キーワード：ホストの認識 (host perceptions)、定性的研究 (qualitative studies)、観光計画 (tourism planning)、デスティネーションマネジメント (destination management)

## 1. 解題

本稿はSage Publications社が2018年に出版した『観光マネジメントハンドブック—ツーリズムへの理論と概念の応用』（*The Sage Handbook of Tourism Management: Applications of Theories and Concepts to Tourism*, Sage Publications Ltd.）の第6部「環境的応用」（Part VI The Environmental Applications）に収められた、英国セントラル・ランカシャー大学のリチャード・シャープリー教授による第35章「「ホスト コミュニティ：観光に対する認識と反応」（The Host Community: Perceptions of and Responses to Tourism）の解説と翻訳である。

著者のリチャード・シャープリー教授は、ノースアンブリア大学教授、リンカーン大学教授（ツーリズム・レクリエーションマネジメント学部長）を経て、現在、セントラル・ランカシャー大学と併せて和歌山大学でも特別

主幹教授として指導している。主な研究領域は「観光と持続可能な開発」、「旅行者の体験」、「ダークツーリズム」、「農村・島嶼観光」などである。

本論文は、デスティネーションマネジメントに関して、ホストの認識研究が、長い間注目され成熟してきているが、理論的・方法論的基盤に基づいて包括的に理解できているかについて問題提起している。また、ホストの認識の既往研究レビューを通じて、観光目的地ごとにホストコミュニティが観光客をどのように認識し、どのように反応しているかに関心を持つ定性的研究の重要性を論じている。すなわち、地域ごとにバラツキのある、住民が観光や観光客をどのように認識し反応しているのかという要因を十分に説明することにより、地域の観光計画やマネジメントに実用的に寄与する形を明らかにしているのである。日本においても、観光公害が深刻になっている。京都市や鎌倉市などの観光都市を中心に、観光の

\*大阪観光大学観光学部／観光まちづくり

悪影響から住民に多大な負荷がかかり、問題化している。ここ3～4年においては特にインバウンドの急激な増加に伴い顕在化してきており、地域住民と来訪者あるいは地域住民間の問題として、国内外の観光地における観光公害の事例や解決施策について研究されはじめている。もともと、観光が地域にもたらす影響については、経済のみならず社会や環境といった様々な次元に及び、正負両面あることが示されており（Jurowski, 2011; 金崎, 2019）、観光による地域への負の影響についての対応は、住民参加や合意形成、マーケティング・マネジメント、観光推進体制・組織の強化等であると指摘されている（後藤, 2019）。この問題においては、地域住民を含む関係者間の理解と合意は不可欠であり、解決のための組織やガバナンスの必要性さらに観光公害の防止という観点での取り組みの重要性は明らかになりつつある。しかしながら、観光まちづくりの実践で起こっている根本的なステークホルダー間のコンフリクト（対立、せめぎ合い）の詳細と解決（解消、妥協）の理論については、あまり触れられていない。四本（2014）は、観光まちづくり研究において権力概念とその表出としてのコンフリクトの視点の不足が観光まちづくりにより不利益を被る地域の人々やあまり賛成していない人々の存在を除外することにつながっていることを指摘している。本著においてシャープリー教授は、観光客とホストの出会いについて類型化している。観光客とホストとの出会いや交流の設定や形態が非常に多様であることを示し、観光客とコミュニケーションの無い地域住民にまで対象を広げている。そのうえで、観光地において、住民による反観光運動が行われるところと行われなところがあることに着目し、ホストの認識をより深く、微妙に異なる理解を引き出すための広範で多角的なアプローチの必要性を示している。ホストの認識の研究課題に着目した本論文は、全国各地で観光地経営におけるガバナンスが必要とされる日本の観光研究においても、重要な示唆を与えるものである。

本訳稿に残された悪訳や誤訳の類は、当然のことながら、私の責任である。稚拙な翻訳に対する読者諸賢のご批判とご指摘をいただければ幸いである。なお、人物名の邦訳に関しては複数あることが考えられ、また参考文献利用の便宜も踏まえたうえで、原則的に英語表記を残

すこととした。

（なお本稿は、本学の2021年度「共同研究事業」（学内公募）において採択された研究課題「観光学の理論と応用に関する基礎的研究—Sage Handbook of Tourism Management (2018)の抄訳とアジア圏における主要観光理論・概念の応用例の把握—」（代表者：小槻文洋）の成果の一部である。）

## 2. 翻訳

### はじめに

1990年には約170万人の観光客がバルセロナを訪れた。バルセロナは、その2年後には夏季オリンピックが開催され、イメージが劇的に変化し（Smith, 2005）、ヨーロッパで最も人気のある観光地の1つへと急速に発展した。2000年までに、バルセロナへの年間来訪者数は314万人とほぼ倍増し、その後2014年には788万人にまで増加した（Statista, 2016）。当然のことながら、このような成長は、観光産業の地域経済への寄与にも反映されている。2013年の観光客の直接支出は1日あたり2600万ユーロで、地元GDPの15%を占め、観光産業は、12万人以上の雇用を直接支えた（Barcelona Tourism, 2015）。

このように、バルセロナの観光地としての発展は成功しているように見えるが、問題が無いわけではない。人口160万人のバルセロナは、観光客の数の多さに比べて人口が少なくだけでなく（約800万人の観光客や宿泊客に加えて、バルセロナには年間2000万人以上の日帰り観光客が訪れている）、過度の混雑や手に負えない観光客の行動が目立つようになってきている。同時に無許可の民泊市場の拡大により、一部のエリアは観光客街に変貌を遂げている。その結果、2015年には、地元住民が観光の無秩序な成長に反対する抗議運動を数多く組織しただけでなく、同年、新たに選出された市長は、特に新規の宿泊施設開発に猶予期間を設けることでさらなる成長を制限し、観光から得られる税金を社会的・環境的スキームに再配分することで、より持続可能なアプローチを推進する計画を発表した（Badcock, 2015）。

バルセロナでの観光に対するこのような地域社会の反応は、決して珍しいということではないが、比較的稀である。たとえば、2016年には、バルマ・デ・マリョルカ

の歴史的地区の壁に反観光を示す落書きがなされたことが報告されており（Spanish News Today, 2016）、ヴェネツィアの住民が、大量な観光客が常時訪れることの抗議のために街頭へ出向いたことも報告されている（Squires, 2016）。しかしながら、その事例は、経営の観点からすると、観光地における地元（ホスト）コミュニティの認識が観光の成功において根本的重要性を持つという、長年にわたって原則的に主張されてきたことを実際に証明するものである（Andriotis and Vaughan, 2003; Zhang et al., 2006）。すなわち、観光産業の発展は必然的に地元の環境や社会にある程度の影響を与え、バルセロナの例のように、地元コミュニティのメンバーが、観光産業のコストが自ら受ける利益を上回ると感じれば、観光産業への支援から手を引く可能性がある（Lawson et al., 1998）。言い換えれば、「満足しているホスト」（Snaith and Haley, 1999）が観光を成功させるには不可欠であり、よって、ホストコミュニティに対する観光のプラスの結果が最適化されて（コストが最小化され）、地域コミュニティの「声」が観光の計画とマネジメントに反映されるようになることが重要である。（Ap, 1992; Jurowski and Gursoy, 2004; Pérez and Nadal, 2005）。

したがって、観光に対するホストの認識や姿勢が長い間注目されてきたのは当然である。実際、McGehee and Anderek (2004: 132)は、「観光学の中で最も体系的によく研究されている分野の1つ」と評しているが、これは、1970年代初期の「影響について」の研究以来、関連する文献が研究領域と概念の両面で発展してきたことを反映している。さらに、この文献は現在も進化を続けており、ますます広範な（とはいえ折衷的な）文献に寄与している。しかしながら、研究が成熟してきたにもかかわらず、しっかりとした理論的・方法論的基盤に基づいて、観光に対するホストの認識を包括的に理解することができたかどうかについては疑問が残る。具体的には、当時の研究が限定的で記述的なアプローチであると批判されてから、25年以上が経過したにもかかわらず（Ap, 1990）、それ以降に行われてきた多くの研究が、「住民対応型」（Vargas-Sánchez et al., 2009）と表現されてきた観光の計画とマネジメントに対し、実用的に寄与したかどうかについては議論の余地がある。

よって、本章の目的は、研究の発展を簡潔に辿り、そ

の発展を定義する主要な概念、テーマ、トレンドを強調し、今後の方向性を示すいくつかの制約を特定することである（より包括的なレビューについては、Deery et al., 2012; Easterling, 2004; Harrill, 2004; Nunkoo et al., 2013; Sharpley, 2014を参照）。具体的には、観光に対するホストの認識に関する知識と理解が、destination managementにどのような形でより役立つかを明らかにする。すなわち、他で議論されているように（Sharpley, 2014）、ホストの認識に関する研究の探求は、基本的な文脈、すなわち観光客とホストの出会いを理解したうえで構築されるべきであるということである。

### 背景：観光客とホストの出会い

居住者やホストの観光に対する認識を研究する際には、観光客と訪問先のコミュニティのメンバーとの関係を理解することに焦点を当てているか、少なくともその中で研究が行われているかを考えるのが自然であろう。言い換えれば、観光の特質は、人々（観光客）が場所（目的地）や他の人々（地域の人々、つまり「ホスト」や他の観光客）を訪問し、交流することによって定義される社会活動ということである。観光客の支出やその他の活動を通じて、観光地に利益をもたらすのは観光客であるが、同様に、観光客の存在やその活動が、観光地の環境や社会にマイナスの影響を与える可能性がある。したがって、ホストの認識の研究は、原則として、観光目的地のコミュニティが観光客をどのように認識し、どのように対応しているかに関心を持つべきである。

しかしながら、不思議なことに、このような研究はほとんどない。Woosnam (2012: 315)が指摘するように、「現在の住民の姿勢に関する文献では、（個人レベルでの）観光客に対する住民の感情が、観光に対する住民の姿勢にどのような影響を与える可能性があるかを検討していない」。しかし、観光客とホストとの出会いの特質は、観光客がどのように認識されるかに重要な影響を与える可能性があり、destination managementにおいて取り組むべき重要な要素である。

当然、観光客とホストの出会いは、その形も機能も実にさまざまである。それにもかかわらず、このような出会いの特質や設定を概念化する試みは長い間行われてきた。初期のSutton (1967) やUNESCO (1976) は、出会

いは、一般的には一過性のものであり、時間と空間に制約があり、不平等・不均衡であり、自発性に欠け、商業的なものであることを示唆している。言い換えれば、観光客とホストの出会いは、当初、組織化された観光空間の中で、観光客と観光分野で形式的または非公式に働く人々の間で、あるいは de Kadt (1979: 50) が示唆するように、「観光客がホストから何らかの商品やサービスを購入する場所」で起こると考えられていたのである。同様に、Krippendorf (1987) は、観光客と観光ビジネスに従事する人々との継続的な交流、非観光ビジネスでの不定期的な交流、そして収入の一部を観光に頼っている人々との定期的な交流、のビジネススペースの3つの出会いのタイプまたは強度を特定している。しかし、もちろん、すべての出会いが商業的な交流を動機としているわけではなく、de Kadt (1979: 50)は、観光客とホストが「向き合う」場所や、「情報やアイデア」を交換するために意図的に出会う場所など、出会いのための追加的な設定を述べている。しかし興味深いことに、これらのモデルではほとんど見落とされているのが、おそらく最も一般的な出会いの形である。このような状況では、特に居住者が多数の観光客といつものように空間を共有している場合（バルセロナやヴェネツィアなど）、観光に対するネガティブな認識が最も大きくなる可能性がある。

したがって、交流の特質とその後のホストの認識に基づいて、観光客とホストの出会いの連続性を概念化することが可能である（図-1 参照）。

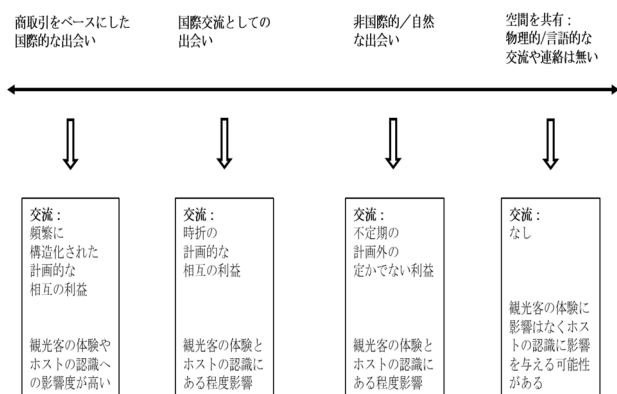


図-1 観光客とホストの出会いの連続体  
 出典：Sharpley (2014: 39)

観光客と観光地のコミュニティメンバーとの出会いは一度きりのものであり、観光客にとってもホストにとっても、これまでの出会いとその後の出会いとは多少なりとも異なる「一度きり」の体験となることは必至であり、このようなモデルでは、観光客とホストの出会いの多様性と複雑性、そしてそれが起こるより広い背景を反映することができないことは明らかである。にもかかわらず、本書は、観光客とホストの出会いの設定や形態が非常に多様であることを示しており、特に、住民やホストが観光や観光客をどのように認識し、なぜ異なる形で反応するのかを理解したうえで、これらの設定や形態の重要性を認識することが大切であることを示している。

このように、出会いの連続体の一端として、観光客およびホストは意図的に商業上の場で出会う。観光客はホストが販売・提供している製品やサービスを購入・消費している。そこですぐに3つのポイントが浮かび上がる。第一に、この背景では、2つの当事者を「ゲスト」と「ホスト」と呼ぶのはおそらく間違っており (cf. Smith, 1977)、「顧客」と「サービス提供者」の方が適切な用語である (Aramberri, 2001)。第二に、さらに重要なことは、このような出会いは、しばしば識閥の観光文化 (Reisinger and Turner, 2003)の中で起こることである。文化的に定義された行動や認識が一時的に中断された人工的な社会的背景では、出会いの重要性を相互に認識する中で、ホストにとっては一過性の出会いとなる通常通りのビジネスでありながら、観光客にとっては新しい体験となる。このような状況では、観光客や観光客グループに対するホストの真の認識や姿勢は、良いサービスを提供したい、利益を上げたいという商業的な責務によって抑制されてしまうことがある。このように、たとえば、Reisinger et al. (2013) の研究で明らかになったように、トルコのリゾート地のホテル経営者は、ロシア人の客の不適切な行動を理解する必要性を認識していた（そして暗黙のうちに受け入れていた）。言い換えれば、商業上の交流の背景では、観光客に対するホストの認識は、経済的要因（収入、利益、雇用）によって条件付けされることから、生計が観光に依存している地域内の人々は、観光と観光客に対してより肯定的な姿勢をとるという先行研究の発見は驚くに値しない (Akis et al., 1996; Pizam 1978)、また、実際には、たとえばヴェネツィアを訪れる

クルーズ船の規模や数を制限しようとする試みは、地元  
の事業者の反対に直面して失敗に終わっている理由も明  
らかにしている（Kirchgaessner, 2015）。

第三に、商業的な交流、あるいは実際には非商業的な  
（社会文化的な）交流に基づく観光客とホストとの出会  
いは自発的に起こる。このような状況下では、出会いは  
比較的バランスのとれた相互に有益な結果となるかもし  
れない。しかし、図 35.1 の連続体の反対側（空間は共  
有しているが、交流・接触はない）に位置すると、概念  
化される出会いは、定義上、非自発的なものである。す  
なわち、地域住民は自発的にそのような出会いを求めて  
いるわけではなく、コミュニケーションや交流がないこ  
とで、相互利益の機会が制限されていることから、社会  
的交流理論などの概念は、それを理解する枠組みとして  
は不十分であるだけでなく、観光に対するネガティブな  
認識が高まる可能性があることを示唆している。たとえ  
ば、ヴェネツィアの場合に話を戻すと、同市（人口5.5万  
人）が毎日6万人以上の観光客を受け入れていることに  
対して、住民による反観光運動が行われており（Squires,  
2016）、観光は地域住民の生活に非常に大きな影響を与  
えていると見られている（Settis, 2016）。逆に、年間2000  
万人もの観光客が訪れているにもかかわらず人気の高い  
英国湖水地方（Sharpley, 2009）のような特定の場所での  
経験から、大量な観光客の存在以外の要因が、観光に対  
するホストや住民の認識を決定する上で重要であること  
が示唆されている。

これらの点を総合すると、観光客とホストの出会いは  
変化に富み複雑な現象であることだけでなく、住民（後  
述するように、いくつかの研究では住民グループの不均  
一性を認識している）や彼らの観光や観光客に対する認  
識を一般化しようとするのは、誤りであるか、おそらく  
は稚拙であることが確認できる。言い換えれば、本章で  
後述するように、ホストの認識をより深く、微妙に異な  
る理解を引き出すためには、より広範で多次元的なアプ  
ローチがおそらく必要である。実際、（本章の目的である）  
簡潔な次節のレビューでは、当然、これまでにおよびホ  
ストの認識研究の弱点がいくつか明らかになっている。

### ホストの認識：研究の概要

観光産業の発展は、観光地にプラスとマイナスの両方

の結果をもたらすことが、長い間認識されてきた。具体  
的には、1960年代後半以降、観光開発の潜在的な利益が  
ますます疑問視されるようになり、多くの先駆的な文献  
（例えば、de Kadt, 1979; Turner and Ash, 1975; Young,  
1973）が観光の負の影響を強調した。その結果、特に住  
民の認識とこれらの影響への対応に焦点を当てた研究が  
関連して行われるようになったのは当然であった。その  
最初の一つが、よく知られたDoxey（1975）の「イラダ  
チ度」（irridex）モデルである。このモデルでは、観光業  
が発展し、観光客の数が増えるにつれて、旅行先の住民  
は観光業に対して反感を抱くようになるという理論が示  
されたが、同様に有名で広く引用されているButler  
（1980）のリゾート・ライフサイクル・モデルでは、観  
光業が発展するにつれて、住民は観光業に対してますま  
す否定的な姿勢をとるようになるという理論が示されて  
いる。どちらのモデルも、その直線性と居住者の同質性を暗黙の前提  
としていることから批判されているが、間違いなく、  
これらのモデルが一緒になって、1980年代初頭以降、ホ  
ストの認識研究の触媒として作用したのであり、Ap  
（1990）の観察に呼応してか、概念的にも方法論的にも洗  
練されてきている。

多くのレビュー論文では、研究の進化をたどり、優勢  
な傾向を探り、制約を明らかにしている。たとえば、  
Harrill（2004）は、文献の中で3つの主要なテーマ、すな  
わち、ホストの認識に影響を与える変数、理論的枠組み、  
分析方法を特定している。これに対して、Deery et al.  
（2012）は、(i) 定義と概念、(ii) モデル開発、(iii) 機  
器設計、(iv) 機器テストという4つの段階を経て研究が  
発展してきたことを示唆しているが、Sharpley（2014）  
は、これらの段階を時系列的に示した証拠は文献に存在  
しないと指摘している。にもかかわらず、Deery et al.  
（2012）とNunkoo et al.（2013）は、多くの研究の重要  
な特徴に注目している。それは、主に定量的な方法を用  
いており、典型的には大規模調査に基づくものであるが、  
それはテストする変数や分析方法に特徴があるだけであ  
る。ほとんどの研究では、住民の認識に影響を与える可  
能性のある特定の変数をテストしたり、クラスター分析  
によって住民をセグメント化したりすることを目的とし  
ていることを考えると、定量的手法の使用は理解できる  
が、単純化された理論的に弱い研究であると考えられる

いる (Woosnam, 2012; Zhang et al., 2006)。

さらに、研究の大部分は一般的に先進国、特に北米の事例研究に基づいており、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドでも研究が行われている (Nunkoo and Gursoy, 2012) ことが観察されている。同時に、多くの研究は国内観光に暗黙のうちに焦点を当てており、例えば北米の研究では、国内市場を惹きつける可能性の高い農村観光やレクリエーション施設に焦点を当てていることが多い。その結果、いくつかの顕著な例外を除いて (例えば、Pérez and Nadal, 2005)、主流の観光地はほとんど見落とされてきた。したがって、Sharpley (2014: 42) が指摘するように、国際的に「観光産業が発達している地域や観光への経済的依存度が高く、(感化されていないにしても) 住民が観光に敏感である可能性のある地域は、調査の対象外とされている」のである。このことは、現存の研究の多くの成果が、多くの「典型的な」リゾート地や観光地における観光の実用的な計画やマネジメントには、ほとんど関連性がないことを示唆している。さらに、上述した Doxey や Butler のモデルの影響にもかかわらず、どちらも住民の観光に対する認識が時間の経過とともに変化し、通常は否定的な方向に変化することを実証しようとしているが、興味深いことに、Wright と Sharpley による最近の研究 (Wright and Sharpley, 2016) では、災害観光の文脈ではあるが、逆のことが起こったことがわかっている。言い換えれば、ほとんどのホストの認識研究は「単一の期間のデータであるため、結論は限られているかもしれない」(Huh and Vogt, 2008: 446)。

このように、全体的に見ると、研究の実用的な寄与には多くの大きな制約があるように思われる。つまり、このテーマを扱った研究は膨大な量に上るにもかかわらず、より効果的なデスティネーションの計画・マネジメントにどの程度寄与できるのかは不明なままである。とはいえ、1980年代後半以降、研究の進化が見られるようになってきた。

### 研究：影響から認識へ

観光に対するホスト地域や居住者の認識に関する初期の研究が、主に観光の影響に焦点を当てたものであったのは、当然のことであろう。つまり、すでに見てきたように、1970年代後半以降、観光学の研究者たちは、いわ

ゆる「観光の影響」に関心を持つようになり、特に観光開発がもたらす負の影響に焦点を当てるようになったのである。これは、一般的な新興の環境運動 (Pringle, 2000) や、特に「成長の限界」イデオロギー (Meadows et al., 1972) の影響が先行していることを反映している部分もあり Schumacher (1974) のような論評者の主張に反して、マス・ツーリズムの出現との関係にあると考えられる。同様に、1980年代初頭までには、効果的でない観光計画が悪影響を及ぼすことを示す重要な証明がなされた (Mathieson and Wall, 1982)。いずれにしても、研究者がまず注目するのは、地域住民が観光の影響をどの程度感じているのか、あるいは経験しているのかを探ることである。McGehee and Anderek (2004: 132) は、ホストの認識研究における「観光の影響」の段階と呼んでいるが、研究は一般的に、ホストのコミュニティ間での影響の経験と、その経験の性質を決定する要因、たとえば、個人宅 (リゾート地に近い、あるいはリゾート地から遠い) や、観光に対する経済的依存度などを特定しようとするものである (たとえば、Brougham and Butler, 1981; Haralambopoulos and Pizam, 1996; King et al., 1993; Liu and Var, 1986; Milman and Pizam, 1988; Um and Crompton, 1987)。たとえば、リゾート地から遠く離れた場所に住んでいて観光への依存度が低い住民は、観光産業に従事している住民に比べて、観光に対するポジティブな (必ずしもネガティブではない) 姿勢が低いことがわかった。同時に、これらの研究はほとんどが描写的であった。「住民にとってどのような影響が関心事であるかを知ることは重要であるが…… (中略) ……なぜ住民がそれらを特定の方法で認識するのかについての洞察は得られない」(Deery et al., 2012: 67) ことから、先に述べた Ap (1990) の批判がある。

続いて、この研究では「観光の認識」というアプローチが採用された (McGehee and Anderek, 2004: 132)。言い換えれば、観光が地域住民によってどのように受け止められているのか、特にその認識について決定づける要因を理解することが、計画やマネジメントの目的にはより有意義であるという認識のもと、研究者は、地域住民が経験した観光の影響を探ることから、それらの認識に関する知識や理解を深めることへと関心を移したのである。このアプローチの中では、(i) 住民の認識を決定した

り予測したりする可能性のある変数の特定と検証、(ii)住民は同質の集団ではないという認識のもと、観光に対する支持度合に応じて地域社会を細分化する、という2つの大きな視点を取り入れられてきた。これらについては以下で個別に検討するが、このような認識のアプローチにおいて、概念的な枠組みの中で研究を位置づけようとする試みが増えてきていることにも注目すべきである。これは表向きには健全な理論的根拠に基づいて研究を支えるために行われているが、理論的な信頼性を与えようとして、しばしば失敗する試みに過ぎない。

たとえば、すでに述べたように、多くの研究では社会的交換理論をはっきりと用いている。社会的交換理論とは、大まかに言えば、人と人またはグループ間の物質的、記号的な交換のプロセスを説明しようとするものであり、より正確に言えば、それに従事するすべての人々が有利な結果を期待して行われる、意図的で合理的に取り決められた社会的相互作用の形態である。しかし、ホストの認識研究の中では、観光の負担が受益よりも大きいと認識している住民の方がネガティブな認識を持っているという、まだ直感的な発見を正当化するために、社会的交換理論が誤って使われていることが頻繁にある。そうすると、社会的交換理論自体の制約が見落とされるだけでなく(Pearce et al., 1996)、どんな社会的交換もそれが起こるより広い社会文化的文脈によって条件付けられるということだけでなく、より実用的なレベルでは、定義による社会的交換理論の適用には、交換に関与する両当事者の役割、つまり観光客とホストの両方についての研究と理解が必要である。しかし、本章ですでに立証したように、すべての研究ではないにしても、ほとんどの研究は主にホストに焦点を当てており、一般的には「住民の姿勢を予測するために使用される変数、つまり、住民の中に存在する、あるいは住民のアイデンティティの一部として存在するもので、住民と観光客の間に存在する関係ではないもの」を調査している(Woosnam, 2012: 316)。要するに、研究において観光客が排除されていることで、「社会的交換」という概念は、交流が起こらない「共有空間」という一般的な文脈においては、なおさら無意味なものとなっているのである。

その結果、Berger and Luckmann (1991)のよく知られた現実の社会的構築の概念、つまり社会的現実が社会の

メンバー間の動的な相互作用によって創造され、維持されるという概念に似た社会的表象理論のような他の概念が、ホストの認識研究の代替的な概念的枠組みとして提案されている(Andriotis and Vaughan, 2003; Fredline and Faulkner, 2000)。しかし、繰り返しになるが、社会的表象理論は、なぜ特定のグループの住民が同様の認識を共有するのかを説明することができるかもしれないが(したがって、セグメンテーション研究への応用も可能である)、ほとんどの研究から観光客が除外されているため、その関連性には制約がある。しかし、本章で示唆したように、既存の研究の制約は、理論的な概念だけでなく、採用されている全体的なアプローチにもある。しかし、その前に、「観光客の認識」へのアプローチの中で採用されている2つの視点に立ち返る必要がある。

#### ホストの認識：重要な役割を果たす変数

他でより詳細に議論されているように(Sharpley, 2014)、多くの研究では、観光が地域住民にどのように受け止められているか(必ずしも反応しているわけではないが)を決定する変数を特定し、測定し、比較することに焦点を当てている。その際、地域住民が観光開発に対してどのように認識し、暗黙のうちにどのように反応するかを説明し、予測しようとしている。つまり、Doxey (1975)やButler (1980)の議論や、Ap and Crompton (1993)が提言したような潜在的な反応(例えば、極端な場合には住民は観光地から撤退する)は、厳正な学術的審査を受けたことはほとんどないのである。

本研究で特定されテストされた変数は、文献では広く検討され、分類されている。しかし、有用なこととしては、Faulkner and Tideswell (1997)によって特定された2つの大まかな項目である、「外部」変数、すなわち目的地に関連する変数と、個々のホストに関連する「内部」変数で調べることができる。一般的に、外部変数とは、観光開発の段階や性質および観光の他の特徴に関連する要因を指す。たとえば、これまでの研究では、観光分野の成熟度に応じてホストの認識がどのように変化するか研究されてきた(Allen et al., 1988; Sheldon and Abenjona, 2001; Upchurch and Teivane, 2000; Vargas-Sánchez et al., 2009)が、観光客の数やタイプ(Johnson et al., 1994; Sheldon and Var, 1984)、観光客の国籍や愛国

心（Griffiths and Sharpley, 2012; Pizam and Sussman, 1995）、目的地に対する観光客の密度（Bestard and Nadal, 2007）、季節性（Belisle and Hoy, 1980）などのより広範な問題にも対処し、これらの要因はすべて解決されている。

逆に、内在的変数の研究は、個人固有の要因に焦点を当てている。このような研究では、収入と雇用の両方の観点から観光産業への経済的依存度などの根本的な問題に長い間取り組んできた（Brougham and Butler, 1981; King et al., 1993; Wang and Pfister, 2008）が、観光への経済的関与が観光に対するより肯定的な姿勢をもたらす傾向があることを明らかにした。実際、経済的依存度は他の変数を上回る可能性があるが、雇用条件や低賃金などの要因によってポジティブな認識が緩和される可能性もある。また、居住地の影響を調査した研究も盛んに行われており、観光地に近いほど、特に経済的に観光に依存していない場合は、観光に対するネガティブな印象が強くなるという仮説が立てられている。しかし、これは必ずしもそのとおりとは限らない（Raymond and Brown, 2007）。同時に、年齢、性別、教育レベルなどの人口統計学的変数がホストの認識に影響を与える可能性があると考えられている（Haralambopoulos and Pizam, 1996; Mason and Cheyne, 2000）が、例えば高齢者が若い世代よりもポジティブな姿勢を持っている可能性を示唆している。しかし、このような変数と観光に対する認識の違いの間には相関関係は見出されていない。

最近の研究では、彼らの価値観が観光に対する認識に与える潜在的な影響（Choi and Murray, 2010; Woosnam, 2012）や、社会的身分意識（Palmer et al., 2013）など、個々のホストに関連したより「個人的」な変数に焦点を当ててきた。同様に、居住者のコミュニティへの愛着も、滞在期間の長さや家族が近くに住んでいることなどの要因に基づく潜在的な変数として考慮されている（Andereck et al., 2005; Nepal, 2008; Ross, 1992）。しかし、これらの「変数」研究の全体的な数と範囲に反して、特に注目すべきは、特定の変数と観光に対するホストの認識との間に一貫した関係があるかどうかと考える場合、ほとんどないという事実である。実際、他の変数に関係なく、経済的に観光に依存している人の方がそうでない人よりもポジティブな認識を持っているという主要な経済的要因

以外には、特定の変数と観光に対するホストの認識との間に一貫した相関関係は、研究からは見出せなかった。このことは、もちろん、これらの研究の結果が非常に特殊なケースであり、一般的で実用的な意味合いは見出せないことを示唆している。

### ホストの認識：セグメンテーション研究

前節で述べた研究の制約は、多くの研究が居住者と受け入れホストを同質であると考えていることを、ある程度反映していると思われることである。つまり、観光地の居住者における特定の個人やグループによって観光に対する認識が異なる可能性があるかと仮定するのが論理的であるが、多くの研究ではこの点が見落とされているのである。そのため、クラスター分析に基づいて住民の認識の違いを特定する試みが数多く行われてきた。当然、これらの試みは、文脈、目的、測定手段の点で大きく異なる。たとえば、初期の研究では、Davis et al. (1988) はフロリダ州の観光開発に対する姿勢によってフロリダ州の住民をセグメント化し、5つのクラスター（「好きな人」、「理由があって好きな人」、「中間者」、「慎重なロマン主義者」、「嫌いな人」）を明らかにしており、後者の2つはかなりの反観光層であることを示している。対照的に、Fredline and Faulkner (2000) は、オーストラリアで開催されたゴールドコーストのインディレースという大きなイベントに対する住民の反応を調査し、イベントから得られる便益の程度に応じてクラスター化しているのに対し、Pérez and Nadal (2005) は、バレアレス諸島の住民を新しい観光開発への支持度に応じてクラスター化している。たとえば、Andriotis and Vaughan (2003) は、観光に対する認識が教育レベルによって異なることを見出した。

これらの研究の特質や焦点は様々であるが、すべてではないにしても、ほとんどの研究では、観光がどの程度のメリットやコストをもたらすと考えられているかに基づいてクラスターを形成している。さらに、採用されている用語にも共通点があり、観光に最も好意的なクラスターは「愛好者」と呼ばれ、最も好意的でないクラスターは「嫌う人」と呼ばれることが多い。それにもかかわらず、これらの研究は一般的には特殊なケースで、主に定量的な調査方法に基づいているため、「変数」研究と同



様の制約がある。異なるクラスターが特定されているにもかかわらず、なぜ特定のクラスターが観光に対する特定の姿勢を保持しているのかを説明することができないのである。実際、本章では、これから述べるように、観光地の計画やマネジメントに役立つ可能性があるという点で、これまでのホストの認識研究における制約のうちの2つに過ぎない。

### ホストの認識：これまでの経緯

本章で先に述べたように、観光に対するホストの認識は、観光学研究の中で最も長く研究されているテーマの一つである。1970年代からの間に、研究の量も研究範囲も非常に拡大してきた。同様に、研究の深さと厳密さの面でも進歩が見られ、研究の概念的基盤や採用されている方法論がますます洗練されてきている。つまり、学術的な観点から見ても、大きな進歩を遂げたといえる。

しかし、実用的な経営の観点からは、どのような進展があったのか定かではない。言い換えれば、この研究が始まった当初のきっかけは、観光は旅行先のコミュニティにメリットとコストの両方をもたらすという認識と、コストがメリットを上回ると感じれば、コミュニティは観光に対して敵対的になったり、支持から手を引いたりするだろうといった考えにあった。したがって、このテーマについて発表されているほとんどの研究は、研究の正当性を主張しており、その結果、この研究はデスティネーションマネジメントに役立つことを目的としていると思われる。しかし、本章の考察から明らかなように、本研究からは、いくつかの理由により、全体としては実用的な教訓はほとんど得られていない。

まず第一に、そしておそらく何よりも先に述べたように、現存する研究の大部分は定量的調査に基づいており、その制約が他の研究者によって指摘されている(Deery et al., 2012、Nunkoo et al., 2013)。実際、観光学の研究は一般的に定量的手法が主流であると長い間主張されてきたが(Walle, 1997)、Mehmetoglu (2004)は、特に北欧の研究者が行っている観光とホスピタリティの研究は、量的実証主義を重んじると報告している。このような状況が続いているかどうかは定かではないが、定量的手法と定性的手法の相対的なメリットは広く議論されているが(Bryman, 2001; Finn et al., 2000; Hanson and

Grimmer, 2007)、ホストの認識研究は、定義上、間違いなく質的な調査を必要とする。言い換えれば、定量的だが「認識の研究は、現実性を低下させ勝ちである……(中略)……見えているものを凝視すると、目に見えるものがすべての真実ではないことを私たちは知っている」(Moufakkir and Reisinger, 2013: xiii)のである。要するに、この調査では、旅行先の住民が観光についてどのように感じているかという「何を」は明らかになったが、「なぜ」を説明することはできないということである。

第二に、多くの研究の設定と特質が、成果の価値と一般化の可能性を制限していることである。事例研究は地理的、経済的、社会文化的文脈、観光の種類と規模の両面で大きく異なるだけでなく(多くの研究は北アメリカの農村部のレクリエーション地域に焦点を当てている)、研究の成果に共通性もなく、その多くは非典型的な観光地と言われるような所に位置している。別の言い方をすれば、海岸沿いのリゾート地であれ観光都市であれ、確立された主要の観光地は、研究ではほとんど見落とされているが、住民の観光に対する認識についての知識と理解が最も有益なのは、これらの(バルセロナなど、本章の序で述べたような)観光地で間違いないと言える。同様に、観光開発の動的特質は、特定時点での単一の研究で構成されていることがほとんどであるため、この研究には取り入れられていない。言い換えれば、観光そのものが進化し、変化していく中で、住民の認識や姿勢が時間の経過とともにどのように変化していくのかということは考慮されていないが、そのような知識は長期的な観光地計画に大きく寄与する可能性がある。さらに、ほとんどの研究では、観光に対する認識や姿勢は研究されているが、それに対する反応は研究されていないことにも注意が必要である。実際に、1つの注目すべき例外(Carmichael, 2000)としては、観光開発が計画されていることに対して強い肯定的または否定的な認識を持っている住民であっても、その後、観光開発を称賛したり、抗議したりすることなく、穏やかに行動していることがわかった。

第三に、最近の研究では、生活の質や幸福感といったより広い概念的枠組みの中でホストの認識を探ろうとする試みがなされているが(たとえば、Andereck and Nyaupane, 2011、Kim et al., 2013)、依然として、一次元

的である。すなわち、必ず住民の観光に対する認識に焦点を当て、特定の変数をテストするのが一般的であるにもかかわらず、より広い社会文化的文脈や、より一般的には住民の「生活の世界」が見落とされているのである。Pearce et al. (1996)が述べているように、人は合理的で体系的な情報処理者ではなく、むしろ衝動や感情で行動することが多いだけでなく、観光に対する認識は、より広い社会文化的・歴史的枠組みの中で形成されることがある。観光の領域の外部にある様々な要因（この研究では概して取り上げていない）が、ホストの認識に影響を与えるかもしれない。たとえば、人々は社会的・環境的な理由から特定の場所に住むことを選択し、観光に対するネガティブな認識を抑えているかもしれないのである。

要するに、この研究では、地域住民が観光や観光客をどのように認識し、どのように反応しているのかを十分に説明することができず、特にそれらの認識や反応のばらつきを説明することができないのである。たとえば、バルセロナの住民は観光開発に反対して抗議活動を行っているのに、他の多くの観光都市では抗議活動を行っていないのはなぜなのだろうか。この疑問に答えるためには、研究に別のアプローチが必要であることは明らかである。

### 結論：研究に対する変容的アプローチ

学術的なホストの認識研究からデスティネーションマネジメントへの実用的な寄与を求めるのは、ある程度は意欲的といえるかもしれない。言い換えれば、ある観光地における観光に対する地域住民の認識や反応を特定し、十分に説明することができたとしても、その意味合いは必ずしも他の観光地に転用できるとは限らないということである。とはいえ、ある観光地でのホストの認識をより深く理解すれば、他の観光地での観光計画やマネジメントについても、より幅広い教訓が得られる可能性がある。しかし、この章で示唆されているように、このように理解を深めることは、最近の研究からは得られていない。生活の質などの要因を研究している最近の研究でさえ、Deery et al. (2012)がホストの認識の「第一層」と表現しているものにしか踏み込んでいない。

それゆえに必要とされるのは、住民やホストの観光に

対する認識を、住民の生活における最も有力な社会的、文化的、経済的要因を特定する研究の中に位置づけ、ホストコミュニティの社会的現実を理解するという多次元的なアプローチである。このような研究へのアプローチでは、当然、定量的研究では明らかにできない（そして確かに説明がつかない）、より深い「真実」を明らかにするために、第一層の下を掘り下げようとする定性的研究が必要となる。そうすることで、地域住民がなぜ観光に対して特定の姿勢をとるのか、なぜ特定の方向に反応するのか、しないのかを説明するための要因や影響が浮かび上がってくるかもしれない。たとえば、Wright and Sharpley (2016) は、このような代替的なアプローチのまだ珍しい例として、イタリアのラクイラの住民が大地震後に訪れた観光客に対して最初に見せた反感は、何世紀も前から孤立感や部外者への不信感を反映していたが、その後の住民のより積極的な姿勢は、震災後の数年間の限られた復興プロセスに対する反応であったことを明らかにしている。同様に、このようなアプローチは、英国湖水地方が観光地としての景観や文化として定義されているにもかかわらず、多くの人々が英国湖水地方に住むことを選んだ理由を明らかにするかもしれない (Walton and Wood, 2014)。逆にいえば、このようなアプローチがもっと広く選ばれなければ、学術的に厳正で「科学的」な研究が数多く生み出されるが、それらの研究は、間違いなく、問題解決にはほとんど、あるいは全く寄与していないことになる。

### 【原著引用・参考文献】

- Akis, S., Peristianis, N. and Warner, J. (1996) 'Residents' attitudes to tourism development: The case of Cyprus', *Tourism Management*, 17(7): 481-94.
- Allen, L., Long, P., Perdue, R. and Kieselbach, S. (1988) 'The impacts of tourism development on residents' perceptions of community life', *Journal of Travel Research*, 27(1): 16-21.
- Amuquandoh, F. (2010) 'Lay concepts of tourism in Bosomtwe Basin, Ghana', *Annals of Tourism Research*, 37(1): 34-51.
- Andereck, K. and Nyaupane, G. (2011) 'Exploring the nature of tourism and quality of life perceptions

- among residents', *Journal of Travel Research*, 50(3): 248–60.
- Andereck, K., Valentine, K., Knopf, R. and Vogt, C. (2005) 'Residents' perceptions of community tourism impacts', *Annals of Tourism Research*, 32(4): 1056–76.
- Andriotis, K. and Vaughan, R. (2003) 'Urban residents' attitudes toward tourism development: The case of Crete', *Journal of Travel Research*, 42(2): 172–85.
- Ap, J. (1990) 'Residents' perceptions research on the social impacts of tourism', *Annals of Tourism Research*, 17(4): 610–16.
- Ap, J. (1992) 'Residents' perceptions on tourism impacts', *Annals of Tourism Research*, 19(4): 665–90.
- Ap, J. and Crompton, J. (1993) 'Residents' strategies for responding to tourism impacts', *Journal of Travel Research*, 32(1): 47–50.
- Aramberri, J. (2001) 'The host should get lost: Paradigms in tourism theory', *Annals of Tourism Research*, 28(3): 738–61.
- Badcock, J. (2015) 'Incoming Barcelona mayor wants to introduce tourist cap', *The Telegraph*, 1 June. Available at: [www.telegraph.co.uk/news/worldnewseurope/spain/11643802/Incoming-Barcelona-mayor-wants-to-introduce-tourist-cap.html](http://www.telegraph.co.uk/news/worldnewseurope/spain/11643802/Incoming-Barcelona-mayor-wants-to-introduce-tourist-cap.html) (Accessed 12 September 2016).
- Barcelona Tourism (2015) *Barcelona Tourism Annual Report 2014*. Available at: <http://professional.barcelonatourisme.com/imgfiles/estad/Est2014b.pdf> (Accessed 6 September 2016).
- Belisle, F. and Hoy, D. (1980) 'The perceived impact of tourism by residents: A case study of Santa Marta, Colombia', *Annals of Tourism Research*, 7(1): 83–101.
- Berger, P. and Luckmann, T. (1991) *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. London: Penguin Books. [ピーター・L. バーガー、トーマス ルックマン (山口節郎訳) 『現実の社会的構成—知識社会学論考』新曜社、2003 年]
- Bestard, B. and Nadal, R. (2007) 'Attitudes toward tourism and tourism congestion', *Région et Développement*, 25, 193–207.
- Brougham, J. and Butler, R. (1981) 'A segmentation analysis of resident attitudes to the social impact of tourism', *Annals of Tourism Research*, 8(4): 569–90.
- Bryman, A. (2001) *Social Research Methods*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Butler, R. (1980) 'The concept of a tourism area cycle of evolution', *Canadian Geographer*, 24(1): 5–12.
- Carmichael, B. (2000) A matrix model for resident attitudes and behaviours in a rapidly changing tourist area. *Tourism Management*, 21(6): 601–11.
- Choi, C. and Murray, I. (2010) 'Resident attitudes towards sustainable community tourism', *Journal of Sustainable Tourism*, 18(4): 575–94.
- Cropanzano, R. and Mitchell, M. (2005) 'Social exchange theory: An interdisciplinary review', *Journal of Management*, 31(6): 874–900.
- Davis, D., Allen, J. and Cosenza, R. (1988) 'Segmenting local residents by their attitudes, interests, and opinions toward tourism', *Journal of Travel Research*, 27(2), 2–8.
- Deery, M., Jago, L. and Fredline, L. (2012) 'Rethinking social impacts of tourism research: A new research agenda', *Tourism Management*, 33(1): 64–73.
- Denzin, N. and Lincoln, Y. (2000) Introduction: The discipline and practice of qualitative research. In N. Denzin and Y. Lincoln (Eds), *Handbook of Qualitative Research*, 2nd Edn, (pp.1–28). London: Sage.
- Doxey, G. (1975) 'A causation theory of visitor-resident irritants: Methodology and research inferences', in *Proceedings of the Sixth Annual Conference of the Travel Research Association* (pp. 195–8). San Diego, CA: Travel and Tourism Research Association.
- de Kadt, E. (1979) *Tourism: Passport to Development?* New York: Oxford University Press.
- Easterling, D. (2004) 'The residents' perspective in

- tourism research: A review and synthesis', *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 17(4): 45–62.
- Emerson, R. (1976) 'Social exchange theory', *Annual Review of Sociology*, 2: 335–62.
- Faulkner, B. and Tideswell, C. (1997) 'A framework for monitoring community impacts of tourism', *Journal of Sustainable Tourism*, 5(1): 3–28.
- Finn, M., Elliott-White, M. and Walton, M. (2000) *Tourism and Leisure Research Methods*. Harlow, UK: Pearson Education.
- Fredline, E. and Faulkner, B. (2000) 'Host community reactions: A cluster analysis', *Annals of Tourism Research*, 27(3): 763–84.
- Griffiths, I. and Sharpley, R. (2012) 'Influences of nationalism on tourist-host relationships', *Annals of Tourism Research*, 39(4): 2051–72.
- Hanson, D. and Grimmer, M. (2007) 'The mix of qualitative and quantitative research in major marketing journals, 1993–2002', *European Journal of Marketing*, 41(1+2): 71–88.
- Haralambopoulos, N. and Pizam, A. (1996) 'Perceived impacts of tourism: The case of Samos', *Annals of Tourism Research*, 23(3): 503–26.
- Harrill, R. (2004) 'Residents' attitudes toward tourism development: A literature review with implications for tourism planning', *Journal of Planning Literature*, 18(3): 251–66.
- Hsu, C. (2000) 'Residents' support for legalized gaming and perceived impacts of riverboat casinos: Changes in five years', *Journal of Travel Research*, 38(4): 390–5.
- Huh, C. and Vogt, C. (2008) Changes in residents' attitudes toward tourism over time: A cohort analytical approach. *Journal of Travel Research*, 46(4): 446–55.
- Johnson, J., Snepenger, D. and Akis, S. (1994) 'Residents' perceptions of tourism development', *Annals of Tourism Research*, 21(3): 629–42.
- Jurowski, C. and Gursoy, D. (2004) 'Distance effects on residents' attitudes toward tourism', *Annals of Tourism Research*, 31(2): 296–312.
- Kim, K., Uysal, M. and Sirgy, J. (2013) 'How does tourism in a community impact the quality of life of community residents?' *Tourism Management*, 36: 527–40.
- King, B., Pizam, A. and Milman, A. (1993) 'Social impacts of tourism: Host perceptions', *Annals of Tourism Research*, 20(4): 650–65.
- Kirchgaessner, S. (2015) 'Cruise ship access to Venice at stake in mayoral election', *The Guardian*, 11 June. Available at: <https://theguardian.com/world/2015/jun/11/cruise-ships-venice-mayoral-election> (Accessed 15 September 2016).
- Krippendorf, J. (1987) *The Holiday Makers: Understanding the Impact of Leisure and Travel*. Oxford: Butterworth-Heinemann.
- Lawson, R., Williams, J., Young, T. and Cossens, J. (1998) 'A comparison of residents' attitudes towards tourism in 10 New Zealand destinations', *Tourism Management*, 19(3): 247–56.
- Liu, J. and Var, T. (1986) 'Resident attitudes toward tourism impacts in Hawaii', *Annals of Tourism Research*, 13(2): 193–214.
- Mason, P. and Cheyne, J. (2000) 'Residents' attitudes to proposed tourism development', *Annals of Tourism Research*, 27(2): 391–411.
- Mathieson, A. and Wall, G. (1982) *Tourism: Economic, Physical and Social Impacts*. Harlow, UK: Longman.
- McGehee, N. and Anderek, K. (2004) 'Factors predicting rural residents' support for tourism', *Journal of Travel Research*, 43(2): 131–40.
- Meadows, D. H., Meadows, D. L., Randers, J., & Behrens, W. W. (1972). *The Limits to Growth: A Report for the Club of Rome's Project on the Predicament of Mankind* London. Pan Books. (D・H・メドウズ、D・L・メドウズ、J・ランダース、W・W・ベアランズ三世 (大来佐武郎監訳) 『成長の限界—ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社、1972年)

- Mehmetoglu, M. (2004) 'Quantitative or qualitative? A content analysis of Nordic research in tourism and hospitality', *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism*, 4(3): 176–90.
- Milman, A. and Pizam, A. (1988) 'Social impacts of tourism on Central Florida', *Annals of Tourism Research*, 15(2): 191–204.
- Moufakkir, O. and Reisinger, Y. (Eds) (2013) *The Host Gaze in Global Tourism*. Introduction: Gazemaking: Le regard - Do you hear me? (pp. xi–xvi). Wallingford, UK: CABI.
- Nepal, S. (2008) 'Residents' attitudes to tourism in central British Columbia, Canada', *Tourism Geographies: An International Journal of Tourism Space, Place and Environment*, 10(1): 42–65.
- Nunkoo, R. and Gursoy, D. (2012) 'Residents' support for tourism: An identity perspective', *Annals of Tourism Research*, 39(1): 243–68.
- Nunkoo, R., Smith, S. and Ramkissoon, M. (2013) 'Resident attitudes to tourism: A longitudinal study of 140 articles from 1984 to 2010', *Journal of Sustainable Tourism*, 21(1): 5–25.
- Palmer, A., Koenig-Lewis, N. and Jones, L. (2013) 'The effects of residents' social identity and involvement on their advocacy of incoming tourism', *Tourism Management*, 38(1): 142–51.
- Pearce, P., Moscardo, G. and Ross, G. (1996) *Tourism Community Relationships*. Oxford, UK: Pergamon Press.
- Pérez, E. and Nadal, J. (2005) 'Host community perceptions: A cluster analysis', *Annals of Tourism Research*, 32(4): 925–41.
- Pizam, A. (1978) 'Tourism's impacts: The social costs to the destination community as perceived by its residents', *Journal of Travel Research*, 16(4), 8–12.
- Pizam, A. and Sussman, S. (1995) 'Does nationality affect tourist behaviour?' *Annals of Tourism Research*, 22(4): 901–17.
- Pringle, L. (2000) *The Environmental Movement*. London: Harper Collins.
- Raymond, C. and Brown, G. (2007) 'A spatial method for assessing resident and visitor attitudes towards tourism growth and development', *Journal of Sustainable Tourism*, 15(5): 520–40.
- Reisinger, Y., Kozak, M. and Visser, E. (2013) 'Turkish host gaze at Russian tourists: A cultural perspective', In O. Moufakkir and Y. Reisinger (Eds), *The Host Gaze in Global Tourism* (pp. 47–66). Wallingford, UK: CABI.
- Reisinger, Y. and Turner, L. (2003) *Cross-Cultural Behaviour in Tourism: Concepts and Analysis*. Oxford, UK: Butterworth-Heinemann.
- Ross, G. (1992) 'Resident perceptions of the impact of tourism on an Australian City', *Journal of Travel Research*, 30(3): 13–17.
- Schumacher, E. (1974) *Small Is Beautiful: A Study of Economics as if People Mattered*. London: Abacus. [E・F・シューマッハー (小島慶三・酒井懋訳) 『スモール・イズ・ビューティフル : 人間中心の経済学』 (講談社学術文庫 730) 講談社、1986 年]
- Settis, S. (2016) *If Venice Dies*. New York: New Vessel Press.
- Sharpley, R. (2009) 'The English Lake District: National park or playground?' In W. Frost and C.M. Hall (Eds), *Tourism and National Parks: International Perspectives on Development, Histories and Change* (pp. 155–66). London: Routledge.
- Sharpley, R. (2014) 'Host perceptions of tourism: A review of the research', *Tourism Management*, 42: 37–49.
- Sheldon, P. and Abenjona, T. (2001) 'Resident attitudes in a mature destination: The case of Waikiki', *Tourism Management*, 22(5): 435–43.
- Sheldon, P. and Var, T. (1984) 'Residents attitudes toward tourism in North Wales', *Tourism Management*, 5(1): 40–7.
- Smith, A. (2005) 'Conceptualizing city image change: The "re-imaging" of Barcelona', *Tourism Geographies*, 7(4): 398–423.
- Smith, V. (Ed.) (1977) *Hosts and Guests: The*

- Anthropology of Tourism. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press. [※1977年の第1版ではなく、1989年の第2版の翻訳として、ヴァレン・L・スミス 編 (市野澤潤平、東賢太郎、橋本和也監訳) 『ホスト・アンド・ゲスト 観光人類学とはなにか』ミネルヴァ書店、2018年。原著 | Valene L. Smith Ed., 1989, *Hosts & Guests: The Anthropology of tourism*, 2nd ed., University of Pennsylvania Press]
- Snaith, T. and Haley, A. (1999) 'Residents' opinions of tourism development in the historical city of York', *Tourism Management*, 20(5): 595–603.
- Spanish News Today (2016) 'Palma residents protest against the mass tourism which is destroying their lives'. Available at: [http://spanishnewstoday.com/palma-residents-protest-against-the-mass-tourism-which-is-destroying-their-lives\\_74103-a.html](http://spanishnewstoday.com/palma-residents-protest-against-the-mass-tourism-which-is-destroying-their-lives_74103-a.html) (Accessed 13 September 2016).
- Squires, N. (2016) 'Venetians brandish shopping trolleys and pushchairs in protest against mass tourism', *The Telegraph*, 12 September. Available at: [www.telegraph.co.uk/news/2016/09/12/venetians-brandish-shopping-trolleys-and-pushchairs-in-protest-a/](http://www.telegraph.co.uk/news/2016/09/12/venetians-brandish-shopping-trolleys-and-pushchairs-in-protest-a/) (Accessed 6 October 2016).
- Statista (2016) 'Number of tourists visiting Barcelona from 1990–2016'. Available at: [www.statista.com/statistics/452060/number-of-tourists-in-barcelona-spain/](http://www.statista.com/statistics/452060/number-of-tourists-in-barcelona-spain/) (Accessed 13 September 2016).
- Sutton, W. (1967) 'Travel and understanding: Notes on the social structure of touring', *International Journal of Comparative Sociology*, 8(2): 217–33.
- Turner, L. and Ash, J. (1975) *The Golden Hordes: International Tourism and the Pleasure Periphery*. London: Constable.
- Um, S. and Crompton, J. (1987) 'Measuring resident's attachment levels in a host community', *Journal of Travel Research*, 26(1): 27–9.
- UNESCO (1976) 'The effects of tourism on socio-cultural values', *Annals of Tourism Research*, 4(2): 74–105.
- Upchurch, R. and Teivane, U. (2000) 'Resident perceptions of tourism development in Riga, Latvia', *Tourism Management*, 21(5): 499–507.
- Vargas-Sánchez, A., Plaza-Mejía, M. and Porrás-Bueno, N. (2009) 'Understanding residents' attitudes toward the development of industrial tourism in a former mining community', *Journal of Travel Research*, 47(3): 373–87.
- Vargas-Sánchez, A., Porrás-Bueno, N. and Plaza-Mejía, M. (2011) 'Explaining residents' attitudes to tourism: Is a universal model possible?' *Annals of Tourism Research*, 38(2): 460–80.
- Walle, A. (1997) 'Quantitative vs. qualitative tourism research', *Annals of Tourism Research*, 24(3): 524–36.
- Walton, J. and Wood, J. (2014) *The Making of a Cultural Landscape: The English Lake District as a Tourist Destination*. Farnham, UK: Ashgate.
- Wang, Y. and Pfister, R. (2008) 'Residents' attitudes toward tourism and perceived personal benefits in a rural community', *Journal of Travel Research*, 47(1): 84–93.
- Ward, C. and Berno, T. (2011) 'Beyond social exchange theory: Attitudes toward tourists', *Annals of Tourism Research*, 38(4): 1556–69.
- Woosnam, K. (2012) 'Using emotional solidarity to explain residents' attitudes about tourism and tourism development', *Journal of Travel Research*, 51(3): 315–27.
- Wright, D. and Sharpley, R. (2016) 'Local community perceptions of disaster tourism: The case of L'Aquila, Italy', *Current Issues in Tourism*, Published online: DOI: 10.1080/13683500.2016.1157141.
- Young, G. (1973) *Tourism: Blessing or Blight?* Harmondsworth, UK: Penguin.
- Zamani-Farahani, H. and Musa, G. (2012) 'The relationship between Islamic religiosity and resident

resident perceptions of socio-cultural impacts of tourism in Iran: Case studies of Sare'in and Masooleh', *Tourism Management*, 33(4), 802-14.

Zhang, J., Inbakaran, R. and Jackson, M. (2006) 'Understanding community attitudes towards tourism and host-guest interaction in the urban-rural border region', *Tourism Geographies*, 8(2): 182-204.

【引用・参考文献】

- 金崎賢希（2016）「地方と創生」『産研論集』46, pp. 51-57.
- 後藤健太郎（2019）「観光による地域への負の影響にどう向き合うべきか」『観光文化』240, pp. 4-7.
- 四本幸夫（2014）「観光まちづくり研究に対する権力概念を中心とした社会学的批判」『観光学評論』Vol2-1, pp. 67-82.
- Jurowski, C., (2011) "Tourism Development and Destination Community Residents," in Y. Wang & A. Pizam eds., *Destination Marketing and Management: Theories and Applications*, CAB International, pp. 284-299.